



塚本珪一・稲垣政志・  
河原正和・森 正人著  
「日本のオオセンチコガネ」  
月刊むし・昆虫図説シリーズ3. 112 ページ  
定価 6,912 円 (税込)

オオセンチコガネはとても美しい。間違いなく、日本産甲虫の美麗種トップ 10 に入れてよいと思う。しかも身近な虫である。

もう 40 年近く昔のことになる。友人の標本箱でオオセンチを初めて見た私はその美しさに強く打たれ、週末を待ちわびて小海線沿線の牧場に一人採集に出掛けた。あいにくの梅雨空の下、牛糞起こしは気分の良いものではなかったが、何 10 個目かの糞塊の下から現れた赤紫色に輝くその姿を目にして、冷え切った身体が熱く火照った思い出がある。

実は当時、私の虫友関係は小幡・五味・堀口という強面の糞虫屋諸兄に完全包围されたような状態にあった。それだからこの小海線採集行の延長線上に、憧れのルリセンチとミドリセンチの採集行も予定されていたはずなのだが、なぜかその機会は訪れることはなかった。やがてライフワークとなるカミキリムシに強く傾倒するにつれて、糞虫に対する熱意も失せていったのである。

「日本のオオセンチコガネ」を手にしたとき、まず思い浮かんだのが、そんな自分の青くさい時代の出来事であった。あの頃は、どんな虫に対しても、無条件に強く興味を惹かれたものである。

虫屋はふつう自分の専門領域(分類群)を持っている。資金や寿命などを少し試算すればわかることだが、虫をやるには人生は短すぎるし、研究でも収集でも一個人の裁量に限界はある。これが専門を持つ主な理由かもしれないが、ある意味で諦めの形にすぎないのである。実際に、暇も財力もあるコレクターは美しい昆虫を悉く集めてしまう。ドイツ箱ウン千箱なんていう規模の人である。何が楽しいのかとイヤミの一つも口にしたくなるが、内心では羨ましくてしょうがない。

そうした目線で改めてオオセンチを眺めてみた。もちろん、私はコレクションを持っていないから、本書を開いただけである。

オオセンチは北海道から屋久島まで広く分布する。自分の拙い経験から分布はもっと局所的だと思いついていたが、自治体単位で記録がないのは香川、佐賀および沖縄の 3 県だけという。まさに日本を代表する甲虫である。著者らは異常な執念のもと、この虫の色彩変異を都道府県単位で図版に並べ尽くした。かねてより生物図鑑は本来の目的を超えて、美術書の世界まで昇華するだろうと期待していたが、ご覧のように本書は表紙からして美術書そのものである。

ところで、こうしたオオセンチの色彩変異は、生物地理学の視点で捉えた地域集団とは、どうやら異質なものらしい。日本列島の隅々まで広く優占する赤紫色の集団の中に、青色型や緑色型が不連続に現れてくる。彼らは広域に分布する色彩多形な遺伝子集団から、たとえば環境圧のようなストレスにより選択的に発現したものだろう。それには餌資源を依存する大型獣の移動、あるいは放牧などの人間活動が影響してきたように思われる。素人考えなので、間違っていたらお許し願いたい。図版に目を落とし東西に流していくと、変異の安定性と不連続性に不思議な思いが湧いてくる。

あとがきの中で、本書の出版が虫屋の収集欲を刺激するかむしろ萎えさせるかと、著者らは楽しい予想を投げかけてくる。決して萎えたわけではないが、私などは昔の夢を叶えてくれた喜びもさることながら、もうオオセンチだけはおなか一杯である。完璧な図鑑はその一冊で収集欲も満たしてくれるのだ。

これもあとがきの中の一節。多くの虫の命を奪った昆虫図鑑に鎮魂の詩を添えたいというくだりがある。この言葉は虫屋的にはグサリと胸に突き刺さる。しかし、私が事実そうであったように、本書がもたらす充足感は無益な殺生に抑止力があるようだから、こうした著者らの祈りも必ずや読者の心に届くに違いない。

本書は、むし社 HP (<http://www.mushi-sha.com/>) か、電話 (03-3383-1461・1462)・Fax (03-3383-1417) により注文できる。

(新里達也 (株)環境指標生物)